

『クーポンで国立公園めぐり』に見る遊覧旅行の一考察 —大正～昭和初期における観光文化研究—

A Study of the Pleasure Travel through the Consideration of “A
Tour Making Use of an Excursion Ticket in the National Park”
—A Study of the Touristic Culture ,1925-1936—

谷沢 明
Akira Tanizawa

要旨

鉄道省のクーポン式遊覧券の発売（大正 14 年〈1925〉）と、国立公園の制定を背景として『クーポンで国立公園めぐり』（昭和 11 年〈1936〉社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー〈日本旅行協会〉発行）が発売された。この小冊子は「国立公園クーポンコース」なる遊覧コースを組み、「スペシメンツアー」と称する旅程見本を掲載した国立公園を対象とする旅行案内書である。本来、自然環境を保護すべく制定されるべき国立公園は、我が国において国民の健康増進はもとより、より濃厚に観光のための場として捉えられていた事実を如実に物語る一冊である。一連の解説文には、山岳・溪谷・湿原・湖沼・温泉・展望地等の固有名詞が多々記載されているため、当時の国立公園及びその周辺の観光地の状況を知る事ができる。とりわけ、火山地形を中心に、山岳・溪谷・湖沼・海岸の変化に富んだ地形が観光資源として把握され、国立公園を巡る観光旅行を生み出したことが指摘できる。記述内容には、昭和初期の国立公園を対象とする観光利用の考え方が濃厚に現われており、しかも、交通機関の発達によりその利用が容易になったことが強調されている。その意味において、この小冊子は、戦前の国立公園観を物語る一資料としてとらえることができる。本稿は、『クーポンで国立公園めぐり』の解説を通して、山河を巡る旅が、国立公園を巡る観光旅行に展開した姿を、時代背景と共に考察するものである。

はじめに

本稿は、大正～昭和初期における観光文化研究の一考察である。

主資料とする『クーポンで国立公園めぐり』（昭和 11 年〈1936〉）（写真 1）は、藤井務氏（大正 5 年〈1916〉生まれ、故人）¹⁾の旧蔵コレクション（旅行関係のパンフレット類）を、子女である安藤典子氏（『るるぶ』元編集長）から著者が譲り受けたものの中の一点である。

藤井務氏は、昭和 21 年（1946）の復員後、日本交通公社に 40 年間勤務された方である。藤井氏がシンガポ

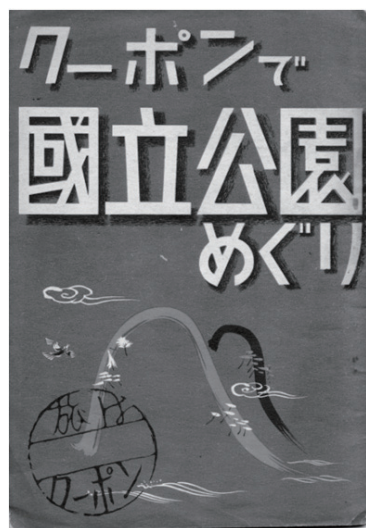


写真1 クーポンで国立公園めぐり

ールから復員後配属されたのは、戦後公社に初めてできた「資料係」であった。この「資料係」は、蒐集した各種情報を社内に配信する係である。藤井氏は若い時から地理や旅行が好きで、入社するまでにほぼ全国を旅行し、各地の山などにも精力的に登っており、戦前から、行く先々で観光パンフレットを入手していた。そして、それが仕事につながった、という。²⁾藤井氏は、戦前から戦後にわたって観光パンフレットのみならず、各地の郷土玩具や行く先々での神社仏閣のお札類まで幅広く蒐集された。

旅行案内書の調査研究はこれまでなされてきたものの、とりわけ、観光の歴史を知る手掛かりとなる旅行案内書の類は、改版に当たって旧版が廃棄される運命にあつて、資料としての保存が困難なことが指摘されている。すなわち、旅行案内書が消耗品である、という性格に起因しているからである。さらに、旅行パンフレットは、その消耗品的性格が旅行案内書よりもより顕著であり、それがまとまった形で残されて資料として活用されるのは、一般的にはあり得ないことである。

一個人が、行った先々で一生かけて蒐集した旅行パンフレットがまとまって残されたのは、ある意味では奇跡かもしれない。その旅行パンフレット（小冊子を含む）の解説を通して、一時代の観光文化を知る手掛かりの試みの一例として、本稿を執筆する次第である。

1. 『クーポンで国立公園めぐり』

『クーポンで国立公園めぐり』は、昭和11年（1936）10月25日、社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）の発行で、B6サイズ46頁、定価5銭で販売された。ちなみに、当時、ビューロー発行の月刊雑誌『旅』は定価30銭、『ツーリスト』の定価は50銭であるので、きわめて安価な小冊子である。

『クーポンで国立公園めぐり』刊行は、鉄道省のクーポン式遊覧券の発売と、国立公園の制定を背景としていることは言うまでもない。

大正14年（1925）10月10日から発売開始されたクーポン式遊覧券は、発駅から着駅までの乗車券・乗船券・自動車券をセットにし、これに旅館券をつけて一冊に綴じ込んだ切符で、鉄道省が設定してビューローに委託販売したものである。このクーポン式遊覧券は、昭和30年（1955）発売の周遊券、翌31年（1956）発売の均一周遊券の原型とされるものである。周遊券が戦後の高度経済成長期における観光旅行の大衆化を牽引する力となつたとすれば、クーポン式遊覧券もまた、昭和初期の観光旅行ブームに火をつけた存在といえよう。併せて、いわゆる「周遊型」観光旅行の需要を呼び起こすものでもあつた。

大正14年（1925）は、ビューローが邦人旅客にむけて省線一般鉄道乗車券の販売を開始した年にもあたっている。その動きに連動して、ビューロー案内所の市中進出が企てられ、大正14年（1925）9月、日本橋三越内の案内所開設を手始めに、昭和に入ると各地の百貨店へのビューロー案内所の出店が盛んに行われるようになった。そのこともまた、昭和初期の観光旅行ブームを煽った一因とみてよいであろう。

一方、国立公園制定は明治末期から論議はあつたものの、大正12年（1923）に内務省衛

生局によって国立公園候補地が 16 カ所指名され、昭和 6 年 (1931) 4 月に国立公園法が制定され、その後、昭和 9 年 (1934) から 11 年 (1936) にかけて国立公園 12 カ所が指定された。昭和 9 年 (1934) 3 月の第 1 次指定は、瀬戸内海、雲仙、霧島の三国立公園、同年 12 月の第 2 次指定は、阿寒、大雪山、日光 (尾瀬を含む)、中部山岳、阿蘇の五国立公園、昭和 11 年 (1936) 2 月の第 3 次指定は、十和田湖、富士箱根、吉野熊野、大山の四国立公園であり、この 12 カ所が我が国における戦前に指定された国立公園である。

第 3 次指定のわずか 8 カ月後には、「国立公園クーポンコース」なる遊覧コースを組み、「スペシメンツアー」と称する旅程見本を掲載した『クーポンで国立公園めぐり』が刊行されるのであるが、早業と言えは早業である。本来、自然環境を保護すべく制定されるべき国立公園は、我が国において国民の健康増進はもとより、より濃厚に観光のための場として捉えられていた事実を如実に物語る一冊である。

2. 山河を巡る旅

国立公園内を巡る観光旅行は、山河を中心とする景勝地を巡って自然景観を楽しむ旅の延長線上にある、と位置づけられる。山河を巡る旅は近世から見られたものの、それが大衆化して観光旅行ブームを湧き起こすのは、大正～昭和初期にかけてのことである。その前段階として、明治期にウィリアム・ガウランドやウォルター・ウェストンらの西洋人によって日本の「山岳美」が発見され、志賀重昂の『日本風景論』(明治 27 年 <1894>) により地理学的観点から、日本の新しい「風景美」が見直されたことが契機となった点が挙げられる。その後、日本山岳会の中心メンバーでもあった小島烏水の『日本山水論』(明治 38 年 <1905>) が上梓され、大正期に入ると、徳富蘇峰『山水小記』(大正 3 年 <1914>)、田山花袋『山水大観』(大正 3 年)、『山水帖』(大正 6 年 <1917>)、大町桂月『山水処々』(大正 6 年)、『山水めぐり』(大正 8 年 <1919>) など多くの山水紀行文が出版され、これらの出版物が多くの人々を山河を巡る旅に誘ったことは周知のとおりである。

また、明治期の鉄道の発達、大正期の電車・バスの発達で、それまで近寄りがたかった幽玄の地が観光地として登場することも、時代背景として重要である。ちなみに、明治 22 年(1888)に東海道線が全通して、線路の敷設距離は 1,000 マイルを超えた。明治 24 年(1891)には上野～青森間、明治 33 年(1900)には神戸～下関間の鉄道が開通して、鉄道旅行による日本縦断旅行さえ可能になった。鉄道が国有化された日露戦争直後の明治 39 年(1906)には、線路の敷設総延長距離は 5,000 マイルに及んでいる。この著しい鉄道網の発達が、新しい形の観光旅行を呼び起こす背景になっていたことは、言うまでもない。

さらに、鉄道院・鉄道省が発行した一連の旅行案内書も人々を観光旅行に誘う存在として忘れることができない。鉄道院は、明治 43 年(1910)に『鉄道院線沿道遊覧地案内』を発行し、大正 3 年(1914)には書名を『鉄道旅行案内』と改めて版を重ねることとなった。その後、鉄道省は『神まうで』(大正 8 年 <1919>)、『温泉案内』(大正 9 年 <1920>)、『お寺まあり』(大正 11 年 <1922>)、『日本北アルプス登山案内』(大正 13 年 <1923>)、『スキ

一とスケート』(大正 13 年)と、続々と旅行案内書を刊行し、その流れが全八巻の『日本案内記』(昭和 4~11 年(1929~36))に結実したことは周知のとおりである。

加えて、昭和 2 年(1927)、大阪毎日新聞社と東京日日新聞社の主催、鉄道省の後援により、一般からの投票をもとに日本を代表する八つの景勝地を著名人が決める「日本新八景」の選定が行われた。これは、国民の間に多大な関心を集めた出来事であり、山岳・渓谷・瀑布・温泉・湖沼・河川・海岸・平原の自然景観がメディアによって観光地としてクローズアップされたイベントであった。それは、山河を中心とする景勝地を巡って自然景観を楽しむ旅が大いに関心をもたれていた時代を象徴する出来事、と捉えることができる。

3. 『クーポンで国立公園めぐり』の内容

『クーポンで国立公園めぐり』(46 頁)の内容構成は、序文(2 頁)、クーポンの説明(2 頁)、本文(25 頁)、旅程見本(17 頁)となっている。本文は、それぞれの国立公園ごとに、解説文、交通案内、公園内クーポン指定遊覧地、公園内及びその付近のクーポン指定旅館が記載され、「国立公園クーポンコース」と題する地図が挿入されている。なお巻末には、「クーポン発売所」として「日本旅行協会(ジャパン・ツーリスト・ビューロー)案内所」の一覧が付されている。

序文に「クーポン式遊覧券」とはいかなるものかが示されているので引用したい。³⁾

〈今から十余年前、鉄道省に於ては国内景勝地巡り旅行に利便を提供して探勝旅客を誘致し、隠れた風光の開発を計ると共に、之に依り一般国民の健康増進に資する為クーポン式遊覧券を設定致しました。本券は視察、保養、其他の廻遊旅行等に利便を提供するのが主眼でありますので、凡そ之等旅行上旅客の苦痛となるべき点は之を排除し、又旅客の利便となるべき点は大きに之を増進せしむることに努め運賃の割引、長期の通用期間、旅館の茶代拝辞、傷害保傷の提供等、種々特点を付与したのであります。〉

ここには、鉄道省がクーポン式遊覧券を設定した意図、目的とともに、各種特典が披露されている。なお、クーポン式遊覧券設定に当たり、鉄道省は全国にクーポン指定遊覧地を設け、その指定地を二ヵ所以上巡る旅客に限定してクーポン式遊覧券を販売することも記されている。また、国立公園指定とクーポン式遊覧券の関係について、次のように記されている。⁴⁾

〈このクーポン指定遊覧地は全国に約三百ヶ所に及びますが、その中に前述国立公園の景勝地が悉く含まれて居ります事は申す迄もありません。本券の発売を鉄道省より委託されて居ります当日本旅行協会(ジャパンツーリストビューロー)はその宣伝普及に常に努めて参りましたが、最近クーポン券の発売高は一ヶ年一百万円、利用旅客数十数万人の多きに登り、「旅はクーポン」と云はれる迄に到りました。而もこの中国立公園のみを来訪するクーポン旅客は逐次増加し、最近では総人員中約五割を占めて居ります。即ち国立公園を主体としたクーポン案内記作製の必要に迫られるに到り、

又先達十二の国立公園が正式に指定された好機を迎へ、ここに実用案内書を編するに到つたのであります。)

まずは、クーポン指定遊覧地と国立公園の景勝地の関係に触れ、国立公園を来訪するクーポン旅客の増大により、実用案内書として冊子『クーポンで国立公園めぐり』の作成に至った経緯が述べられている。

次いで、本文である。本文中の国立公園の解説文は、簡にして要を得た表現である。また、その記述を通して昭和初期の観光地の一端をうかがい知る内容として資料価値があると判断し、全文を巻末〈資料1〉に掲載した。

解説文は、おおむね、国立公園の面積と所在県名、地形・地質上の特徴、植生等の学術的価値、温泉、史跡、観光・遊覧における楽しみ方等を扱い、それぞれの公園の特徴を述べている。一連の解説文には、山岳・溪谷・湿原・湖沼・温泉・展望地等の固有名詞が多々記載されているため、当時の国立公園及びその周辺の観光地の状況を知ることができる。

以下、『クーポンで国立公園めぐり』解説文の解説を通して、戦前の12国立公園の特徴を、ジャパン・ツーリスト・ビューローがいかに把握していたかについて、いくつかの項目に絞ってまとめてみたい。

解説文の冒頭にくるのは、国立公園の面積と所在の県名及び、地形・地質上の特徴である。前者は、基本データであるのでここでは触れない。地形・地質上の特徴は、取り扱う内容が国立公園であるため重点的に記述し、それぞれの国立公園の指定範囲内の特徴を具体的に示すと共に、全体像を端的にまとめている。その記述の中から、12国立公園の地形・地質上の特徴の記述を抽出すると、〈表1〉のとおりである。

〈表1〉地形・地質上の特徴(『クーポンで国立公園めぐり』解説文:昭和11年)

国立公園	地形・地質上の特徴
阿寒	世界的に雄大な火山地形。阿寒湖・屈斜路湖の二大陥没火口湖を有する複式火山の地形。
大雪山	大雪・十勝・然別の三大火山帯と、石狩山脈の一部。
十和田	十和田湖は典型的陥没火口湖としても世界的名声を博す。奥入瀬溪流は繊細幽玄な景趣。
日光	日光・奥日光・尾瀬地方一円を包含し、日光火山群の地形に属する山岳地帯。
富士箱根	円錐型火山の典型的富士山と複式火山として著名な箱根山、富士の山体を繞る富士五湖。
中部山岳	所謂日本アルプス連峯の高山地帯を占める一大山岳公園。
吉野熊野	水成岩地形に属する吉野群山より北山川、熊野川、紀伊海岸に至る多種多様の風景地。
大山	日本海に君臨する中国第一の高山であり、且鐘型火山の典型たる大山。
瀬戸内海	大小無数の島嶼を浮べて典型的な多島海の最も美しい景観。
阿蘇	複式活火山として世界的に有名な阿蘇山一帯と九重火山帯。
雲仙	四面環海の島原半島に聳立する複雑な集成火山。
霧島	高千穂と韓国岳を盟主とする二十余の端麗な火山が密集する火山群。

これを大別すると、火山地形を中心とする公園（阿寒・大雪山・十和田・日光・富士箱根・大山・阿蘇・雲仙・霧島）、山岳公園（中部山岳）、山岳・河川・海岸の多種多様な風景をもつ公園（吉野熊野）、多島海の景観をもつ海洋公園（瀬戸内海）の四タイプになる。戦前に指定された国立公園の75%は火山地形を中心とする国立公園であったことは、いかにも火山国日本を象徴している。また、火山地形はもとより、山岳・河川・海岸の変化に富んだ地形が観光資源として把握され、国立公園を巡る観光旅行を生み出したことも指摘しておきたい。

次いで植生等の学術的価値についての記述となり、その分量が多いことが注目される。国立公園の設置は、自然保護という目的を持っているため、当然と言えば当然かもしれないが、観光旅行の誘いを目的として作成された小冊子にしては扱いが過大である。植生等の学術的価値の記述を抽出すると、〈表2〉のとおりである。

〈表2〉植生等の学術的価値（『クーポンで国立公園めぐり』解説文：昭和11年）

国立公園	植生等の学術的価値の記述
阿寒	森林は原始的な所謂寒性針葉樹林に属するものであるが、石楠、蝦夷磯つつじの大群落や清楚な白樺林を混へて景観の美を誇る。阿寒湖の毳藻等と共に学術上も興味深い。
大雪山	寒性針葉樹の鬱蒼たる大原始林の広表に至つては他に全く類例を見ない。その森林植生は御花畑に於ける高山植物群落や珍奇な鳴兎等の動植物相と共に、学術資料としても貴重。
十和田	美しい落葉、潤葉樹林に蔽はれてゐるから、新緑紅葉の時期には特に華麗な景観を呈する。八甲田八岳を始め乗鞍岳・楡ヶ峰一帯の山岳はいづれも高山性針葉樹林。各所に高山植物の群落。
日光	戦場ヶ原・尾瀬ヶ原・菖蒲平・鬼怒沼等の湿原は艶麗な御花畑に彩られて、一帯を蔽ふ落葉潤葉樹の美林と山岳性針葉樹林に照応する極めて原始的な景観。
富士箱根	山腹山麓を飾る蓮華躑躅・富士桜・針桜等の各種の植物群落は殊に其の垂直的分布に於て興味深く鳥類の繁殖も亦他に類例の少ないものである。
中部山岳	鬱蒼たる森林は一帯の山腹、溪谷を蔽つて各所に美しい林相を顕し、随所に展開する高山植物の御花畑。
吉野熊野	豊饒な地味と多湿な気象に基因して鬱蒼たる森林に蔽はれてゐるが、山中には大山蓮華や石楠の大群落を初め、学術上興味ある資料も尠くない。
大山	大山山腹に拡がる黒松林、中腹一帯を蔽ふ櫟の原始林、山頂を飾る伽羅木の群落を有す。
瀬戸内海	屋島は林相麗はしき松林に蔽はれて優雅な展望を有し、小豆島の寒霞渓は独特の岩石美と落葉潤葉樹林の景観を誇る。
阿蘇	九重火山麓は高山植物に富む山嶺を起す一大高原地帯。
雲仙	美麗なつつじ、犬柘植の大群落や落葉樹林に修飾せられた秀麗温雅な風景。
霧島	霧島山の山腹には昼尚暗き常緑潤葉樹林が鬱蒼として生育し、その上部には赤松や樅の巨木。山頂部の広大な躑躅の大群落や蝦野の野生海棠。杜鵑や仏法僧等特徴ある鳥類も多く生棲。

森林の植生については、それぞれの国立公園においてひととおり記述し、高山植物の群落である「御花畑」の存在についても触れている。固有名詞として特筆された花は、阿寒の石楠花・蝦夷磯つつじ、富士箱根の蓮華躑躅・富士桜、吉野熊野の大山蓮華・石楠花、雲仙のつつじ、霧島の躑躅・野生海棠である。その他特筆される動植物として、阿寒の毬藻や大雪山の鳴兎（ともに特別天然記念物）が取り上げられていることも注目される。毬藻や鳴兎は、同じ時期に刊行された鉄道省『日本案内記』北海道篇（昭和 11 年〈1936〉）にも取り上げられており、阿寒や大雪山国立公園を象徴する動植物として、すでに有名になっていたことが確かめられる。

これに次ぐ記述は、それぞれの国立公園の特性によって異なるが、最後に、国立公園の楽しみ方について述べて解説文のまとめとしている。国立公園の楽しみ方についての記述を抽出すると、〈表 3〉のとおりである。

〈表 3〉国立公園の楽しみ方（『クーポンで国立公園めぐり』解説文：昭和 11 年）

国立公園	特徴
阿寒	登山、温泉浴、湖上の舟遊魚釣、又冬季は理想的なスキー地として優れた素質に恵まれた公園。
大雪山	観光・登山自然研究旅行に極めて好適の地。氷雪の殿堂の如き大雪・十勝の諸山の冬季登山はスキーヤーの憧憬の的であり、本邦に於ける最高のスキー地となつてゐる。
十和田	観光旅行はもとより、舟遊・釣魚・自然研究・野営生活等各般の利用に適し、夏季冷涼な気候は避暑地として、好適。八甲田一帯はスキー登山として最も優れた素質を備へてゐる。
日光	観光、社寺巡拝、自然研究旅行、避暑、登山、野営生活、舟遊、釣魚、温泉保養、ハイキング、セーリング、スキー、スケート等殆んどあらゆる方面に適してゐる。
富士箱根	特色ある富士登山を始めとして観光・ハイキング・避暑・野営生活・自然研究・舟遊・ゴルフ・乗馬等に適し、交通の至便とホテル旅館等の設備完備と相俟つて内外の探勝者が極めて多い。
中部山岳	上高地・白骨・平湯・中房・葛・黒部鐘釣等は、登山、野営生活に限らず一般の探勝、自然研究旅行にも便利。乗鞍岳、白馬山麓、立山弥陀ヶ原等は絶好の山岳スキー場。
吉野熊野	観光、登山、舟遊等に特長を有する。南方の温暖な気候が四季を通じての楽園を現出するのと相俟つて、京阪の大都会を控へて利用者の数を激増してゐる。
大山	此の公園は近時登山地として重きをなすと共に、冬季に於けるスキー地としては絶好のスロープと雪質に恵まれて西日本に於ける一大中心地となつてゐる。
瀬戸内海	この公園は本邦唯一の海上公園として、巡航、海水浴、釣魚、引網等に好適なのは勿論、海に親しまうとする者にとっては絶好の地位を占めるもの。
阿蘇	坊中より草千里ヶ浜を経て古坊中阿蘇神社に至る登山自動車道を始め、道路の設備も整つてゐるから観光には極めて好適であり、登山、ハイキング、乗馬等を試みるのも面白い。
雲仙	探勝には躑躅紅葉の季節はもとより四季を通じてよい。付近一帯は観光、ゴルフ、乗馬、野営生活、ハイキング等各方面に適して居り、避暑地としても絶好な位置を占めてゐる。
霧島	躑躅の観賞はもとより山中の野営、ハイキング、自然研究も極めて興味の深いものである。温暖な南九州に於ける観光の中心地として四季の探勝者に賑つてゐる。

たとえば、日光国立公園の記述にあるよう、その楽しみ方は、観光、社寺巡拝、自然研究旅行、避暑、登山、野営生活、舟遊、釣魚、温泉保養、ハイキング、セーリング、スキー、スケート等と千差万別である。また、富士箱根国立公園では「交通の至便とホテル旅

館等の設備完備と相俟つて内外の探勝者が極めて多い」、吉野熊野国立公園では「大阪・奈良・和歌山或は三重方面よりの水陸の交通機関は近時漸く利便の度を加へて来た」、阿蘇国立公園では「登山自動車道を始め、道路の設備も整つてゐるから観光には極めて好適。熊本大分間の鉄道豊肥線が阿蘇盆地を横断する外、高森線、久大線の便もあり」、雲仙国立公園では「雲仙の街には島原、小浜、千々石の三方面より自動車道を通じ、宿泊施設が完備」、霧島国立公園では「山麓を廻る国都線、吉都線、肥薩線の鉄道沿線の各駅より自動車を通じ」と、それぞれ、宿泊・交通の利便性を強調している記述が目につく。この小冊子がクーポン遊覧券を使用した観光旅行を誘発する目的で作成されたことは、これらの記述内容からしても明白である。

わが国の国立公園は、発足に至る議論当初から、自然保護と観光開発の二面性を持っていたことが指摘されている。また、昭和6年(1931)制定の国立公園法は、「第一条 国立公園ハ国立公園委員会ノ意見ヲ聴キ区域ヲ主務大臣之ヲ指定スル」以下条文が続くものの、肝心な国立公園の定義、目的が規定されていない。なんとも不思議な法律であるが、主管した内務省では「国立公園トハ自然ノ大風景地ヲ保護開発シ国民ノ健康休養教化ニ供スル為国ノ設立スル公園」と理解されていた、とも指摘されている。⁵⁾

冊子『クーポンで国立公園めぐり』の文面は、昭和初期の国立公園を対象とする観光利用の考え方が濃厚に現われており、しかも、交通機関の発達によりその利用が容易になったことが強調されている。その意味において、この小冊子は、戦前の国立公園観を物語る一資料としてもとらえることができる。

4.十二の国立公園を巡る「旅程見本」

『クーポンで国立公園めぐり』には、本文に続いて旅程見本が掲載されている。旅程見本は、「スペシメンツアー」と表記されている。今は使うことのない用語であるが、「ツアー見本」すなわちモデルコースのことである。この旅程見本は、戦前に指定された国立公園をどの様な形で観光に生かそうとしたのかがうかがえる、大変興味深い資料である。

モデルコースは、12国立公園を10区分して(雲仙、阿蘇、霧島を一つの目的地として扱っている)、6つの出発地(北海道、東北、京浜、近畿と中部、中国、九州)から生まれ、標準所要日数、出発地の主要都市からの費用概算(ただし交通費のみ)が記載されている。費用概算に現れる主要都市は、札幌・小樽・函館(北海道)、青森・仙台(東北)、東京・横浜(京浜)、富山・金沢・岐阜・名古屋・京都・大阪・神戸(近畿と中部)、岡山・広島・下関(中国)、福岡・佐世保・長崎・熊本・鹿児島(九州)の22都市である。

モデルコースは、単純計算すると国立公園10×出発地6の60タイプとなるが、一つの出発地でも複数のコースがあり、この複数25タイプを加えると総計85コースとなる。標準所要日数は、日帰りから最大15日までと幅が広い。鉄道省編纂『日本案内記』全八巻(昭和4~11年(1929~36))掲載の「旅程日程案」と比べても、より緻密になっている。

クーポン式遊覧券は、「指定遊覧地中式箇所以上を巡ること」「廻遊経路が連続する事」

等の所定の条件の中で、起点に戻ってくるオーダーメードの切符である。『クーポンで国立公園めぐり』の表現を引用すると、次のとおりである。⁶⁾

〈クーポンは普通の乗車券の様に単純に径路を定めて常備したものでなく、先ず遊覧径路を自由に定めて頂きまして、その径路に必要な鉄道、汽船、渡船、自動車乗物の切符一切を其の都度作製し、御希望によっては宿泊又は食事用の旅館券をも含め一冊に綴合せるものです。〉

『クーポンで国立公園めぐり』には、85 の旅程見本、すなわちモデルコースが掲載されているものの、旅程そのものは、あくまでも顧客が所定の条件の中でそれぞれオーダーするものである。そして、求めに応じてビューローの担当者が、一件ずつ作成するという性格をもっている。

参考までに、六出発地の中の京浜、近畿・中部の二タイプを例示し、これに「公園内クーポン指定遊覧地」を加筆した表を作成し、巻末に〈資料2〉として掲載する。また、それぞれの旅程見本の概要を整理すると〈表4〉のとおりである。

〈表4〉旅程見本の概要(『クーポンで国立公園めぐり』:昭和11年)

国立公園	旅程見本の概要
阿寒	函館—旭川—野付牛—美幌—北見相生—阿寒湖—北見相生—美幌—美幌峠—屈斜路湖—川湯—弟子屈—釧路—滝川—札幌 (A10日、B12日)
大雪山	旭川—上川—層雲峡—小函—層雲峡—上川—札幌—定山溪温泉—札幌 (A6日、B8日) ただし、近畿中部の場合、定山溪温泉—大沼—大沼公園遊覧—函館—湯の川温泉—函館が追加
十和田	青森—十和田湖子ノロー生—大湯温泉—毛馬内 (A7日、B8日) ただし、復路は、京浜出発の場合松島を、近畿中部出発の場合宇奈月温泉を経由
日光	京浜発の場合、1泊2日～2泊3日の3タイプがあつて「周遊型」でない 近畿中部の場合、日光—中宮祠—湯元温泉—日光—鬼怒川温泉 (B5～6日)
富士箱根	京浜発の場合、日帰り、もしくは1泊2日の8タイプがあつて「周遊型」でない。 近畿中部の場合、大月—精進湖—山中湖—御殿場—箱根千石原—宮ノ下 (B5日)
中部山岳	京浜発の場合、2泊3日～4泊5日の4タイプがあつて登山を目的とする旅行 近畿中部の場合、2泊3日～3泊4日の3タイプがあつて登山を目的とする旅行。
吉野熊野	吉野—吉野山—橋本—高野山—和歌山—白浜温泉—紀伊椿—下里—那智滝—新宮—湊八丁—本宮—湯の峯温泉 (A11日)。近畿中部の場合、3泊4日～7泊8日の3タイプ
大山	大山口—大山登山—大山口—米子—出雲今市—大社参拝—畑薬師—松江 (A9日、B6日) ただし、京浜の場合、美保関—隠岐島が追加
瀬戸内海	京浜：岡山—宇野—高松—屋島—琴平—松山—道後温泉—高浜温泉—大三島—尾道 (A7日) 近畿中部の場合、屋島から先は鞆の浦又は鷺羽山を巡るコースとなる (B5日)
阿蘇他	【阿蘇・雲仙・霧島の三国立公園は、連続する一コースとして設定】 京浜：別府—大分—坊中—阿蘇山—熊本—三角—島原—雲仙温泉—小浜温泉—長崎 (A9日)。 別府—延岡—高千穂—延岡—大淀—青島—霧島神宮駅—霧島温泉—鹿児島—桜島—指宿温泉—阿久根—天草島—三角—熊本 (A14日)。近畿中部：別府—宮崎—霧島神宮駅—霧島神社—霧島神宮駅—鹿児島—熊本—坊中—阿蘇山—熊本—三角—島原—雲仙—小浜温泉 (B12日)

*ただし、A京浜出発、B近畿中部出発の標準所要日数

旅程見本を大別すると、おおむね1週間～2週間の「周遊型」となっている傾向が読み取れる。ただし、京浜に近い日光国立公園と、京浜及び近畿、中部に近い富士箱根国立公園の場合は、日帰り～2泊3日の目的地を絞ったコースが複数設定されている点に違いがみられる。また、中部山岳国立公園の場合は、登山を目的とする旅行が想定されているため、これまた、「周遊型」旅行とは性格を異にしている。

この旅程見本を見ると、「国立公園めぐり」となっているものの、モデルコースの中に温泉地が少なからず含まれていることに気づく。戦前に指定された12国立公園のうち75%は火山地形を中心とする国立公園であることを前述したが、温泉は火山活動と関係して生まれたものである。

『クーポンで国立公園めぐり』本文の記述に戻って、取り上げられた温泉地を抽出すると、〈表5〉のとおりである。

〈表5〉取りあげられた温泉（『クーポンで国立公園めぐり』解説文：昭和11年）

国立公園	温泉の記述
阿寒	探勝の根拠地たる弟子屈温泉の外、公園内には川湯、阿寒を始め、仁伏和琴等の温泉があり、其他、雄阿寒・野中等到るところより湧出する豊富な温泉。
大雪山	層雲峡・愛山溪・吹上・糠平等各地に散在する温泉場は、探勝上好箇の根拠地を為す。
十和田	鳶・酸ヶ湯・猿倉等の温泉は（中略）交通・宿泊の中心を成して居る。
富士箱根	箱根十二湯の温泉は古来名湯として知られ、…
中部山岳	平湯・上高地・白骨・中房・葛・立山・鐘釣・蓮華等の著名な温泉は好適な位置に散在。
吉野熊野	著名な勝浦海岸の温泉郷の外、湯の峯の温泉地もあり、…
阿蘇	阿蘇に於ける湯ノ谷、地獄、垂玉、栃ノ木、戸下、内ノ牧、九重の法華院、筋湯等の温泉場。
雲仙	雲仙温泉地帯には古湯、新湯、小地獄等の泉源があり、…
霧島	明礬、硫黄谷、林田、丸尾等の所謂霧島温泉では避暑や湯治に適し、…

*ただし、日光、瀬戸内海の各国立公園では本文中に温泉の記載は見られない。大山は公園外のため省略。

12国立公園のうち9国立公園の温泉が本文の解説にあらわれる。なお、日光国立公園には湯元温泉、鬼怒川温泉が旅程見本に載っているが、本文中に記載がない。また、大山国立公園は国立公園内に温泉がないため、周辺の三朝・関金・皆生・東郷の各温泉が本文に記載されている。瀬戸内海国立公園については道後温泉・高浜温泉が旅程見本に載っているが、本文中に記載はない。

『クーポンで国立公園めぐり』に現れる旅行形態は、いわば温泉旅行を楽しみつつ国立公園内を遊覧・観光する、という性格が濃厚に表れている、と言えるのではないか。

5.国立公園クーポンコースと交通

『クーポンで国立公園めぐり』の本文には、「国立公園クーポンコース」と題する地図が

それぞれの国立公園ごとに掲載されている。地図には、鉄道（省線・私鉄）、航路（船舶）、自動車道、徒歩による小道が記載され、主要な地名、山岳名、温泉名等が記載されている。本文の後には交通案内もあって、昭和11年（1936）当時のアクセス状況を知る上で大いに参考になる。以下、鉄道・乗合自動車・自動車の便を中心に、これに駅の開業年代を加筆して、それぞれの国立公園への交通を簡単に整理しておきたい。

阿寒国立公園は、石北本線美幌駅（大正元年〈1912〉開業）から分岐した相生線の北見相生駅（大正14年〈1925〉開業、廃止）が起点となっていた。北見相生駅から阿寒湖畔には乗合自動車が営業していた。阿寒湖畔から弟子屈にかけては原始林の中を開削された横断道路がつけられていた。また、弟子屈から摩周湖にかけても自動車道があったが、貸切自動車利用であった。屈斜路湖、川湯温泉には、石北本線美幌駅から美幌峠を経て釧網本線の弟子屈駅（昭和4年〈1929〉開業）・川湯駅（昭和5年〈1930〉開業）に至る乗合自動車通じていた。その他、阿寒湖には定期遊覧船があった。

大雪山国立公園は、石北本線上川駅（大正12年〈1923〉開業）が起点となっていた。上川駅から層雲峡へは、乗合自動車が季節営業していた（5～11月）。この自動車は、層雲峡温泉から柱状節理で名高い景勝地小函まで通じていた。大雪山国立公園の中心である黒岳や旭岳は、今日のように交通の便はなく、徒歩による登山コースとなっている。

十和田国立公園は、古間木駅、青森駅、毛馬内駅の三駅が起点となっていた。日本鉄道古間木駅（現、三沢駅）は明治27年（1894）に開業し、大正7年（1918）に十和田湖畔の子ノ口へ乗合自動車の運行が開始された。日本鉄道青森駅は明治24年（1891）開業、秋田鉄道毛馬内駅（現、十和田南駅）は大正9年（1920）に開業し、昭和9年（1934）に青森～和井内間、翌10年（1935）和井内～毛馬内の省線バスが開通した。なお、十和田湖に遊覧船があった。

日光国立公園は、明治23年（1890）開業の、日本鉄道日光駅が起点となっていた。日光駅は皇族や外国人観光客なども多く訪れる駅として知られた。また、昭和4年（1929）には東武鉄道が東武日光駅を開業した。昭和11年（1936）当時、日光～馬返（乗合自動車）、馬返～中宮祠（ケーブル）、中宮祠～湯本（乗合自動車）と交通網は完備していた。中禅寺湖にはモーターボートによる遊覧があった。

富士箱根国立公園は、富士山・富士五湖が御殿場・富士駅が、箱根は小田原駅が起点となっていた。東海道線の御殿場駅は明治22年（1889）、富士駅は明治42年（1909）の開業である。富士登山の吉田口、須走口には大月駅や御殿場駅から乗合自動車の便があった。富士駅から富士身延鉄道大宮駅まで私鉄が通じていた。富士五湖巡りは、大月駅・御殿場駅・富士駅から定期自動車の便があり、河口湖・西湖・精進湖には巡遊船があった。箱根は、すでに東海道線全通前年の明治21年（1881）、国府津から小田原を経て箱根湯本へ至る馬車鉄道が開業しており、日光と共に日本を代表する観光地として発展していた。大正8年（1919）には箱根登山鉄道が強羅まで開通し、同年乗合自動車も運行を始め、より便利になった。芦ノ湖には元箱根・箱根町・湖尻を結ぶ定期船が就航していた。

中部山岳国立公園の主要観光ポイントは、上高地、白馬、立山であった。上高地へは、大正 11 年（1921）、松本駅から筑摩鉄道が延びて島々駅が開業し、昭和 8 年（1933）バスが上高地へ乗り入れることになった。それ以前は、島々から徳本峠越えの 6 里の山道であった。白馬へは、昭和 7 年（1932）開業の大糸南線信濃四ツ谷駅（現、白馬駅）が起点となっていた。松本～信濃大町間は『クーポンで国立公園めぐり』掲載地図では私鉄となっているが、これは大正 5 年（1916）に全線開通した信濃鉄道である。この私鉄が国有化され大糸線に編入されたのは昭和 12 年（1937）のことであった。立山へは、大正 10 年（1921）、富山駅から立山鉄道が延びて岩峯寺駅が開業した。その 2 年後に千垣駅まで鉄道が延びるものの、千垣から弥陀ヶ原・室堂へかけては、当時は徒歩による山道であった。昭和 30 年代に入って、ようやくバスが通じることとなった。

吉野熊野国立公園は、吉野口駅、朝来駅、新宮駅などが起点となっていた。南和鉄道（関西鉄道の前身）葛駅（現、吉野口駅）が開業したのは明治 29 年（1896）であり、昭和 3 年（1928）に吉野駅が開業し、吉野山遊覧の玄関口になった。熊野本宮へは昭和 8 年（1933）開業の紀勢西線朝来駅から乗合自動車に通じていたが、3 時間余りの長い道のりであった。また同年開業した白浜口駅は白浜温泉遊覧の下車駅であった。新宮鉄道勝浦駅は大正元年（1912）、新宮駅は翌 2 年（1913）の開業で、前者は那智山、後者は瀨八丁の玄関口となった。那智山までは乗合自動車の便があった。瀨八丁へは新宮からプロペラ船が就航しており、次の説明がでている。「この飛行艇は飛行機の構造から思いついてもので、川舟の後部に発動機を取付け、プロペラに依って奔湍を遡航するもので、爆音の著しいのが欠点である」。瀨峡から宮井まで引き返して再び船で本宮に至る水上ルートが開かれていた。なお、当時は串本をまわる鉄道路線は全通しておらず、紀伊椿駅～串本～下里駅間、尾鷲駅～木本～新宮駅間は乗合自動車の利用であった。

大山国立公園は、明治 35 年（1902）開業の伯耆大山駅（旧官設鉄道熊党駅）あるいは、大正 15 年（1926）開業の大山口駅から大山寺まで乗合自動車の便があった。また、明治 45 年（1912）に大社駅が開業し、その後、大正 4 年（1915）一畑軽便鉄道が薬師如来の信仰で名高い一畑まで、さらに昭和 3 年（1928）には松江温泉まで延びて山陰観光の交通網が整備された。

瀬戸内海国立公園は、海路の交通網が早くから発達していたところであるが、これに陸路の交通網が加わった。公園内の主要観光ポイントは鷺羽山、鞆の浦、小豆島、屋島、大三島であった。鷺羽山へは、大正 3 年（1914）開業の下津井軽便鉄道下津井駅から登るコースをとった。鞆の浦へは、大正 2 年（1913）開業の鞆鉄道が福山から通じていた。屋島へは、明治 43 年（1910）に宇野線開業と同時に高松まで宇高航路が開設されて連絡船が就航した。大山祇神社で知られる大三島へは、山陽線尾道から汽船が通っていた。

阿蘇国立公園は、大正 7 年（1918）開業の豊肥線坊中駅（現、阿蘇駅）から阿蘇山神社まで自動車の便があった。「二五人乗大型バス〇台」と、その利便性が強調されている。

雲仙国立公園は、諫早駅から大正 2 年（1913）開業の島原駅まで島原鉄道が通じていた。

また、昭和2年(1927)には小浜地方鉄道として雲仙小浜駅が開業するが、これは10年余りで廃止になった。雲仙へは、島原から乗合自動車の便があった。他に、島原港～三角港間を海路を利用して三角駅から宇土を経て熊本へ至る鉄道もあった。

霧島国立公園は、牧園駅、霧島神宮駅が玄関口であった。霧島温泉へは明治42年(1909)旅客業務取扱を開始した肥薩線牧園駅から乗合自動車の便があった。霧島連山最高峰韓国岳へは、霧島温泉から徒歩による登山であった。霧島神宮へは昭和5年(1930)開業の霧島神宮駅から乗合自動車を通じ、高千穂峰へは霧島神宮から徒歩による登山であった。

以上、12国立公園の交通状況のあらましを縷々述べたが、明治期から陸上交通の便に恵まれていた日光国立公園及び富士箱根国立公園、また海上交通の便に恵まれていた瀬戸内海国立公園の三公園を除いて、他の国立公園はいずれも大正期から昭和初期にかけて交通の便が順次整備されていったことが明らかになる。このように交通機関の発達により、今まで秘境であった山河に、一般人が手軽に足を踏み入れることが可能になり、それが、国立公園の観光利用を推し進める背景になった、とみてよいであろう。また、そのことは、大正～昭和初期の庶民の観光旅行ブームを生み出す要因のひとつであった、と捉えて間違いないであろう。

6.クーポン式遊覧券の魅力

『クーポンで国立公園めぐり』の序文に次いで「クーポンとは！」と題し、クーポン式遊覧券の詳細が記されていることを前述した。その内容は、すでに『日本交通公社七十年史』に資料として収録された昭和10年発行「クーポンの栞」⁷⁾と同一であるため、ここでの紹介は割愛する。しかしながら、本稿の追求する大正～昭和初期にかけての庶民の観光旅行ブームを引き起こす誘因として、その利点を再度確認しておくことが必要である。「クーポン式遊覧券の特長」として、次の七つが挙げられている。⁸⁾

〈一、運賃割引 省線一割引、其他の乗物一割乃至二割引

二、通用期間 内地及北海道、樺太 一ヶ月、台湾 二ヶ月

三、前売 御旅行開始四日前より発売

四、年中発売 他の割引券と異なり年中発売

五、団体学生割引 学生教職員には学生教職員割引又団体三十名以上に対しては所定の団体割引適用

六、旅館券の特典 茶代不要と料金均一(旅館券を御利用の場合旅館使用人への心付は別ですが、茶代は絶対に要りません。尚宿泊、食事に付ての予約も出来ます。温泉旅館で温泉税、湯銭は要りません)

七、傷害保険切符の無料提供 一人三百円の乗物傷害保険切符を無料で添付)

クーポン式遊覧券の利点は、運賃割引があり、安心して使える旅館券、傷害保険が添付していることである。要は、「旅の手数、気苦労を省き旅行をより気持よく、簡単にしたいと云ふ目的で生まれたのがこのクーポン」⁹⁾であった。特に省線区間の運賃が一割引になっ

ているのも人気を高めた理由、といわれている。¹⁰⁾また、次のうたい文句は興味を引く。¹¹⁾

〈此のクーポンを持つて旅行をなされますと恰も案内人を同行するやうなもので、行く先々を切符が教へて呉れます。ですから旅馴れぬ方、独り旅の方などにとって安全なことはもとより、近頃流行の小団体旅行に之を利用しますと、幹事の世話が省かれ、殊に会計のご心配がなくなりますから好都合と存じます。実際最近ではクーポンは単に乗車船用の切符と云ふ役目を遥かに超えて、携帯用旅行案内人(ポータブルガイド)として皆様の御寵愛を受けてみます。〉

その利便性を、「此のクーポンを持つて旅行をなされますと恰も案内人を同行するやうなもの」、「乗車船用の切符と云ふ役目を遥かに超えて、携帯用旅行案内人」と、じつにわかりやすく、ややユーモアを交えたたとえで表現している。なお、ビューローにとって、鉄道省の一般乗車券の代売手数料は無料であったのに対し、クーポン式遊覧券については省線区間運賃の五分を収受することができた。¹²⁾そのため、販売にも勢い熱が入ったことが想像される。

クーポン式遊覧券は、客の求めに応じて遊覧径路を定め、その径路に必要な鉄道・汽船・渡船・自動車乗物の切符一切をその都度作成し、宿泊・食事の旅館券を含めて一冊に綴りあわせる作業を必要とした。前述した藤井務氏は、クーポン作成について次の回想をしている。¹³⁾

〈戦前はそれぞれの担当が得た知識、情報を「会報」に掲載することで、済まされていた。それ以外は個々の社員が持っている知識が、商売の元であった。訪日外国人を案内する担当の人は、鎌倉、日光、箱根、京都、奈良だけに詳しく、旅行クーポンの担当者はクーポン成立要件、私鉄や遊覧船の料金など殆ど頭の中に入れていて、ベテランにはクーポンの神様と言われた人がいた。すべてが職人芸、名人芸であり、新米社員は先輩のやることを見様見真似で覚えていったものである。〉

クーポン式遊覧券を作成するのに「職人芸」「名人芸」の技量を必要とされ、「クーポンの神様」と称される人まで現れたというエピソードは、クーポン式遊覧券が大いに流行していた時代の空気を伝えている。

7.クーポン発売所

『クーポンで国立公園めぐり』巻末に「クーポン発売所」として日本旅行協会(ジャパン・ツーリスト・ビューロー)案内所の一覧が付されている。クーポン式遊覧券は、ビューローの案内所に限って代売することができたことを前述した。昭和11年(1936)10月現在、45カ所のビューローの案内所があり、そこがクーポン式遊覧券販売所の窓口になっていたことが判明する。一覧には、所在地(都市名)・案内所のおかれた場所・電話番号等が記されている。この一覧に『日本交通公社50年史』¹⁴⁾を参考に確認できうる範囲で開設年次を加筆し、電話番号を省略して作成したものが〈表6〉である。

〈表 6〉クーポン発売所 日本旅行協会(ジャパン・ツウリスト・ビューロー)案内所 (昭和 11 年 10 月)

所在地	案内所	開設年次	所在地	案内所	開設年次
東京	東京駅北口		大阪	大丸内	大正 14. 10. 20
	東京駅南口			松坂屋内	昭和 9. 11. 1
	神田駅前			新大阪ホテル	
	帝国ホテル内	大正 12. 1. 11	神戸	三ノ宮駅内	
	日本橋三越内	大正 14. 9. 20		大丸内	大正 2. 1. 1
	日本橋白木屋内	昭和 6. 10. 5	岡山	天満屋内	昭和 8. 11. 15
	日本橋高島屋内	昭和 8. 5. 1	広島	福屋内	
	銀座松屋内	大正 14. 12. 20	下関	駅前案内所	大正 15. 2. 10
	上野松坂屋内	昭和 4. 4. 1	福岡	玉屋内	
	新宿三越内	昭和 6. 6. 15		松屋内	
	新宿伊勢丹内	昭和 11. 3. 10	唐津	シーサイドホテル内	
横浜	野沢屋内		佐世保	玉屋内	
	海岸通り一丁目		熊本	千徳内	
軽井沢	避暑団事務所内		鹿児島	山形屋内	昭和 8. 11. 15
金沢	宮市大丸内	昭和 9. 10. 15	長崎	山崎駅前	
富山	宮市大丸内	昭和 11. 10. 1	雲仙	公園事務所内	
名古屋	広小路通り		仙台	三越内	
	松坂屋内	昭和 7. 5. 1	青森	松木屋内	昭和 11. 4. 15
岐阜	丸物内	昭和 11. 10. 1	函館	今井商店内	
京都	京都駅内	昭和 3. 9. 1	小樽	今井商店内	昭和 11. 4. 20
	大丸内		札幌	今井商店内	昭和 6. 4. 15
大阪	安土町堺筋		釜山	三中井呉服店内	
	三越内	大正 14. 10. 20			

但し、軽井沢・唐津・雲仙は夏季中のみ営業。金沢及び富山の「宮市大丸」はその後の「大和百貨店」。

北は北海道札幌から南は九州鹿児島まで、また当時日本の統治下にあった釜山まで案内所は分布している。都市別では東京 11、大阪 5、横浜・名古屋・京都・神戸・福岡が各 2、その他各 1 となっている。とりわけ注目されるのは、百貨店内に 30 案内所 (66.7%) を数えることである。開設年次は、大正 2 年 (1913) 1 月の神戸大丸内の案内所が最も早い、これは外国人旅客の便を図るために横浜案内所 (大正 2 年 7 月)、長崎案内所 (大正 2 年 8 月) とともに開設されたもので、クーポン式遊覧券発売との関係はない。また、大正 12 年 1 月に開設された帝国ホテル内案内所もクーポン式遊覧券発売以前の設置である。

クーポン式遊覧券が発売された大正 14 年 (1925) には、日本橋三越を最初に、大阪三越、大阪大丸、東京銀座松屋と立て続けに百貨店内にビューローの案内所が開設されている。

そして昭和初期に、北海道から九州にかけての百貨店に次々にビューローの案内所が開かれていったことがわかる。

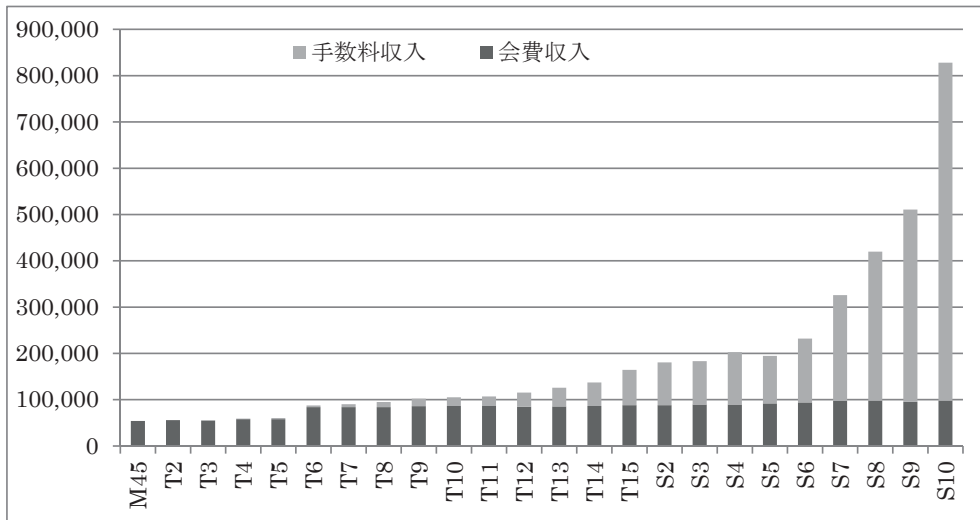
なお、百貨店内へのビューロー案内所開設にあたり、いくつかのエピソードがある。¹⁵⁾ 大正 14 年 (1925) の日本橋三越の場合、三越側から、「ぜひビューローの案内所を開いてほしい、場所や調度など全部無償で提供するからとの申し出があり、開設の運びになった。ただし、鉄道の切符だけでなく芝居の切符も取扱ってほしいという条件がつけられた」という。また、昭和 6 年 (1931) の北海道札幌の今井百貨店の場合も、「家賃、電灯料、設備費用一切を負担するという条件でビューローの出店を要請、これに応じて案内所の開設になった」という。これらのことから、百貨店側も誘客にとって有利であると考えていたことがうかがえる。

都市住民の新たな消費文化を牽引した百貨店にビューローの案内所が次々に開設されていった昭和初年は、観光旅行が一つの消費商品として販売され始めた時代であった、と捉えることができる。「デパートのあるところ、必ずビューローの案内所あり、というイメージになったとさえいえる」¹⁶⁾ と、日本交通公社の社史に記された言葉がそれを象徴している。

観光旅行が一つの商品となったこと、それは、日清・日露の二つの戦争を経て我が国の産業化がすすみ、都市居住人口の増大に伴い国民の就業形態や生活様式が変化し、いわゆる消費的な社会が進展する一方、身近な自然が遠ざかっていく時代の到来を物語っているのではないか。

ついでに述べておくと、ビューローが取扱ったのは、鉄道省のクーポン式遊覧券だけではなかった。ビューロー指定旅館の「単独旅館券」(昭和 7 年 (1932) 発売開始)、全国の著名な社寺の拝観・宿泊・食事・奉納の「社寺券」(昭和 11 年 (1936) 発売開始) はもとより、前述した歌舞伎座の観劇券 (大正 14 年 (1925) 発売開始) 販売なども手掛けている。これらのことは、いずれも都市的生活様式が拡大していく過程で起こった出来事、と捉えてよいであろう。

さて、ここで押えておきたいことは、ビューローの収益についてである。ビューロー会則「本会ノ経費ハ会員ノ醸金及有志者ノ寄付金ヲ以テ之ニ充ツ」(第一章総則・第五条) にあるよう、草創期は会費収入が基本であった。大正 3 年 (1914) からは乗車券等の代売手数料収入がこれに加わるのである。ビューロー設立から昭和 10 年 (1935) までの収入の推移を示すと (図 1) のとおりである。¹⁷⁾



〈図1〉ジャパン・ツーリスト・ビューローの収入の推移 (単位:円 『日本交通公社七十年史』より作成)

設立当初、会費収入のみでスタートしたビューローは、大正5年(1916)から大阪商船の乗船券取り扱いを始め、次いで日清汽船、日本郵船、東洋汽船など外国航路をもつ船会社の乗船券の代売を開始して、漸次手数料収入を加えていく。また、第1次大戦後の大正7年(1918)11月から、一般邦人客に対し、日支連絡・日支周遊・日満連絡・日鮮満巡遊等のごく限られた連絡券発売を開始する。省線の一般乗車券及びクーポン遊覧券の代売を開始した大正14年(1925)には会費収入86,250円(62.8%)、手数料収入51,069円(37.2%)であったのに対し、10年後の昭和10年(1935)には会費収入98,000円(11.8%)、手数料収入730,000円(88.2%)と、手数料収入の構成比が急上昇していることが注目される。

当初、外国人観光客の誘致促進を目的として結成されたジャパン・ツーリスト・ビューローであったが、昭和5年(1930)、鉄道省の外局として国際観光局が創設されると、それまでビューローが力を注いでいた海外観光宣伝業務は国際観光局に移譲されることとなった。このような背景の中で、大正末期からビューローの主力業務となりつつあった乗車乗船券及びクーポン遊覧券の代売に一段と力が注がれるようになり、日本人観光客を対象とした各種観光旅行への誘いが企てられていった、と捉ええることができるのではないかと。

その流れの中で、小冊子『クーポンで国立公園めぐり』の刊行をとらえてみると、この小冊子の意味合いが、より鮮明に浮かび上がってくるのである。

まとめ

本稿の内容を整理すると、以下のとおりである。

鉄道省のクーポン式遊覧券の発売（大正 14 年〈1925〉）と、国立公園の制定を背景として『クーポンで国立公園めぐり』（昭和 11 年〈1936〉）社団法人ジャパン・ツーリスト・ビューロー（日本旅行協会）発行）が発売された。

昭和 6 年（1931）の国立公園法制定に伴い、昭和 9 年（1934）から 11 年（1936）にかけて 3 回にわたって国立公園 12 カ所が指定された。第 3 次指定のわずか 8 カ月後に、『クーポンで国立公園めぐり』が発売されたのである。この小冊子は「国立公園クーポンコース」なる遊覧コースを組み、「スペシメンツアー」と称する旅程見本を掲載した国立公園を対象とする旅行案内冊子である。本来、自然環境を保護すべく制定されるべき国立公園は、我が国において国民の健康増進はもとより、より濃厚に観光のための場として捉えられていた事実を如実に物語る一冊である。

国立公園内を巡る観光旅行は、山河を中心とする景勝地を巡って自然景観を楽しむ旅の延長線上にある、と位置づけられる。山河を巡る旅は近世から見られたものの、それが大衆化して観光旅行ブームを湧き起こすのは、大正～昭和初期にかけてのことである。大正期には数々の山水紀行文が出版され、これらの出版物が多くの人々を山河を巡る旅に誘った。また、明治期の鉄道の発達、大正期の電車・バスの発達で、それまで近寄りがたかった幽玄の地が観光地として登場した。さらに、鉄道院・鉄道省が発行した一連の旅行案内書も人々の観光旅行熱を高めた。加えて、昭和 2 年（1927）、「日本新八景」の選定が行われ、自然景観がメディアによって観光地としてクローズアップされた。それらは、山河を中心とする景勝地を巡って自然景観を楽しむ旅が大いに関心をもたれていた時代を象徴する出来事、と捉えることができる。それら一連の時代背景の中で『クーポンで国立公園めぐり』が刊行された、と考えるとよいであろう。

『クーポンで国立公園めぐり』の解説文は、おおむね、国立公園の面積と所在県名、地形・地質上の特徴、植生等の学術的価値、温泉、史跡、観光・遊覧における楽しみ方等を扱い、それぞれの公園の特徴を述べている。一連の解説文には、山岳・渓谷・湿原・湖沼・温泉・展望地等の固有名詞が多々記載されているため、当時の国立公園及びその周辺の観光地の状況を知る事ができる。また記述内容から、ジャパン・ツーリスト・ビューローが戦前の 12 国立公園の特徴を観光利用の観点からいかに把握していたかも明らかになる。

12 国立公園の地形・地質上の特徴の記述を大別すると、火山地形を中心とする公園（阿寒・大雪山・十和田・日光・富士箱根・大山・阿蘇・雲仙・霧島）、山岳公園（中部山岳）、山岳・河川・海岸の多種多様な風景をもつ公園（吉野熊野）、多島海の景観をもつ海洋公園（瀬戸内海）の四タイプに分類することができる。同時に、火山地形を中心に、山岳・河川・海岸の変化に富んだ地形が観光資源として把握され、国立公園を巡る観光旅行を生み出したことも指摘できる。

『クーポンで国立公園めぐり』の文面は、昭和初期の国立公園を対象とする観光利用の

考え方が濃厚に現われており、しかも、交通機関の発達によりその利用が容易になったことが強調されている。その意味において、この小冊子は、戦前の国立公園観を物語る一資料としてとらえることができる。

旅程見本を大別すると、おおむね1週間～2週間の「周遊型」となっている傾向が読み取れる。ただし、京浜に近い日光国立公園と、京浜及び近畿、中部に近い富士箱根国立公園の場合は、日帰り～2泊3日の目的地を絞ったコースが複数設定されている点に違いがみられる。また、中部山岳国立公園の場合は、登山を目的とする旅行が想定されているため、これまた、「周遊型」旅行とは性格を異にしている。併せて旅程見本に現れる旅行形態は、いわば温泉旅行を楽しみつつ国立公園内を遊覧・観光する、という性格が濃厚に表れている点が指摘できる。

クーポン式遊覧券が発売された大正14年(1925)には、日本橋三越を最初に、大阪三越、大阪大丸、東京銀座松屋と立て続けに百貨店内にビューローの案内所が開設されている。そして昭和初期に、北海道から九州にかけての百貨店に次々にビューローの案内所が開かれていった。都市住民の新たな消費文化を牽引した百貨店にビューローの案内所が次々に開設されていった昭和初年は、観光旅行が一つの消費商品として販売され始めた時代であった、と捉えることができる。昭和5年(1930)、鉄道省の外局として国際観光局が創設されると、それまでビューローが力を注いでいた海外観光宣伝業務は国際観光局に移譲されることとなった。このような背景の中で、ビューローは乗車乗船券及びクーポン遊覧券の代売に一段と力を注ぎ、日本人観光客を対象とした各種観光旅行への誘いが企てられていたことは、ビューローの会費収入・手数料収入構成比の推移からも明白である。

以上指摘した時代背景の中で、『クーポンで国立公園めぐり』が刊行されたのであるが、この小冊子が刊行された昭和11年(1936)は、『日本案内記』の刊行が完結した年でもある。すなわち、日本各地の観光地の情報は、事細かに、かつ網羅的に把握されていた時代である。この蓄積された観光情報に基づき、急きょこの小冊子が編集可能になったことは言をまたないであろう。しかしながら、この冊子が提唱したような国立公園をめぐる観光旅行は、刊行とほとんど時をおかず収束を迎えることとなった。

すなわち、国立公園法制定後、政局は急激に悪化し、¹⁸⁾『クーポンで国立公園めぐり』刊行翌年の昭和12年(1937)に日中戦争が始まり、翌13年(1938年)には国家総動員法が公布され、戦時体制に入ってしまった。このご時世の中、のんびり物見遊山である観光旅行は許されず、質実剛健の旅行適地を訪ねる心身鍛錬の旅、敬神の地・偉人の史蹟・郷土の先駆者の地を訪ね歩く旅といったように、旅行の在り方は変化を余儀なくされた。さらに、昭和15年(1940)、鉄道省は「不用不急の旅行は遠慮して国策輸送に御協力」という方向を打ち出した。そして、ついには遊覧割引制度の中止にいたったのである。¹⁹⁾

戦後、世の中が平穏を取り戻して国民の間に余暇を楽しむ余裕が生まれた昭和30年(1955)、周遊割引乗車券の発売が開始され、高度経済成長期の国民の周遊型観光旅行を大いに盛り上げた。やがて、この周遊割引乗車券は、平成10年(1998)に「周遊きっぷ」に

改められたものの、利用者の減少に伴い平成 25 年（2013）2 月 15 日をもって全廃された。ここに鉄道利用の周遊型観光旅行の時代は、終焉を迎えたのである。

謝辞

本稿の執筆にあたり、藤井務氏（故人）の旧蔵コレクション資料を寄贈いただくとともに、校閲の労をとっていただいた安藤典子氏に御礼申し上げます。また、本稿は、愛知淑徳大学研究助成「景観を中心とする観光資源に関する基礎的研究」（平成 24～25 年度）の研究成果である。助成金を活用して、調査研究の一環として国立公園の景観を実際に見学できたのは、得難い経験であった。記して、研究費をいただいた大学当局に感謝申し上げます。

〈資料1〉『クーポンで国立公園めぐり』(昭和11年)本文

(旧字は新字に改めた)

阿寒国立公園

阿寒国立公園は、北海道釧路、北見の両国に跨り、面積八八・二〇〇町歩、世界的に雄大な火山地形を示す区域を占めてゐる。その殆んど全地域は、阿寒湖・屈斜路湖の二大陥没火口湖を有する複式火山の地形に属してゐて、壮麗な雄阿寒岳・雌阿寒岳・阿寒富士・カムイヌプリ・アトサヌプリ等の火山を抽出して魁偉な地貌を呈し、殊に雌阿寒岳・アトサヌプリ等は噴煙を揚げて活火山の異彩を放つてゐる。その間に湛へられた阿寒・屈斜路の両湖は各特色ある大湖水であるが、其の他、凄愴なる神秘的景観を有する摩周湖を始め、幽邃なパンケトー・ペンケトー等大小の湖沼を擁する一帯の地域は、寒帯林の代表的美林に蔽はれて本邦稀に見る透徹明朗な寒地景観を現出してゐる。森林は主として御料林、国有林の原始的な所謂寒性針葉樹林に属するものであるが、華麗な石楠、蝦夷磯つつじの大群落や清楚な白樺林を混へて景観の美を誇ると同時に、阿寒湖の毳藻等と共に学術上も興味深いものがある。探勝の根拠地たる弟子屈温泉の外、公園内には川湯、阿寒を始め、仁伏和琴等の温泉があり、其他、雄阿寒・野中等到るところより湧出する豊富な温泉は、ボツケの泥火山の如き火山現象と共に価値と興味を添へてゐる。又は前記の諸山はもとより美幌峠・摩周湖双湖台、釧北峠からは極めて雄大な眺望を恣にすることが出来る。従つて登山、温泉浴、湖上の舟遊魚釣、又冬季は理想的なスキー地として優れた素質に恵まれた公園である。

大雪山国立公園

大雪山国立公園は石狩、十勝の二国に互り所謂北海道の屋根と称せられる山岳地帯二二三、九〇〇町歩の面積を占める我国最大の国立公園で、大雪・十勝・然別の三大火山彙と、石狩山脈の一部を包括してゐる。山岳は北海道の最高峯たる旭峯を盟主として北鎮岳・白雲岳・凌雲岳等より成る大雪山から活火山として著名な十勝岳に連り、又トラムウシ山・石狩岳・ニベソツ山等の峻峯を繞らして、其の間に雲の平・高根ヶ原の如き本邦無二の御花畑を展開し、五色ヶ原・沼ノ原の広大な湿原を交へて美しい景観を誇つてゐる。山麓には豪壯な層雲峡の大函、小函の断崖、雄滝、雌滝の名瀑、勝仙峡の溪谷、羽衣滝や然別湖等の勝景を控へ、更に国有林、御料林として山腹に拡がる寒性針葉樹の鬱蒼たる大原始林の広表に至つては他に全く類例を見ないものであり、その森林植生は御花畑に於ける高山植物群落や珍奇な鳴兎等の動物相と共に、学術資料としても貴重なものである。而して層雲峡・愛山溪・吹上・糠平等各地に散在する温泉場は、探勝上好箇の根拠地を為して居り従つて観光・登山自然研究旅行に極めて好適の地である。殊に冬季は絶好の積雪に恵まれ、清白の粧を凝らした静寂な針葉樹林内の壮快な滑走や氷雪の殿堂の如き大雪・十勝の諸山の冬季登山はスキーヤーの憧憬的であり、本邦に於ける最高のスキー地となつてゐる。

十和田国立公園

青森、秋田両県に跨る十和田湖は本邦湖沼中の白眉として幽邃な景勝を誇るものである

が、典型的陥没火口湖としても世界的名声を博して居り、又十和田湖から流出する奥入瀬溪流は繊細幽玄な景趣を有する点に於て他に類例を見ないものである。十和田国立公園の区域は、此の十和田湖と奥入瀬溪流の外闊達たる八甲田火山群一帯を包括する四五、二〇〇町歩の面積を占めてゐて、その大部分は国有林の美しい落葉・潤葉樹林に蔽はれてゐるから、新緑紅葉の時期には特に華麗な景観を呈する。殊に山中・御倉の両半島を突出して千姿万態を示す十和田湖岸と奥入瀬溪流に生ひ繁る鮮麗な樹林や鳶温泉一帯を蔽ふ老樹の森は類稀な美林である。所謂八甲田八岳を始め乗鞍岳・櫛ヶ峰一帯の山岳はいづれも高山性針葉樹林を以て秀麗な山姿を飾り、各所に高山植物の群落、池塘、湿原を交へ又東北部には田代岱の高原が独特の牧野景観を展開してゐる。鳶・酸ヶ湯・猿倉等の温泉はその間に在つて、十和田湖畔の生出、休屋、宇樽部・子ノ口等と共に交通・宿泊の中心を成して居る。この公園は観光旅行はもとより、舟遊・釣魚・自然研究・野営生活等各般の利用に適し、夏季冷涼な気候は避暑地として、好適な条件を充してゐるため、観光客、避暑客で賑ふのみならず、八甲田一帯は冬季到る処積雪良好な斜面を展開してスキー登山として最も優れた素質を備へてゐる。

日光国立公園

日光国立公園は所謂日光・奥日光・尾瀬地方一円を包含し、栃木・群馬・福島・新潟の四県に亘る五七、四〇〇町歩の区域で、日光火山群の地形に属する山岳地帯である。白根山・男体山・燧岳・至仏山等の著名な山岳は、明治大帝より幸の湖の名を賜つた中禅寺を始め幽邃な湯の湖・尾瀬沼・丸沼・菅沼或は明鏡の如き切込湖等大小の堰塞湖を湛へて起伏し、その中に拮がる戦場ヶ原・尾瀬ヶ原・菖蒲平・鬼怒沼等の湿原は艶麗な御花畑に彩られて、一帯を蔽ふ落葉潤葉樹の美林と山岳性針葉樹林に照応する極めて原始的な景観を存し、四季の推移に従つて変化極まりなき美観を誇るのみならず、華厳・霧降・裏見・三丈等の名瀑を始め無数の瀑布を懸ける大谷川・鬼怒川・只見川・片品川の本流、支流も亦随所に非凡な渓谷美を呈してゐる。この秀麗優美な自然風景に配して日光の結構を語る東照宮の建築や由緒深き二荒山、輪王寺等の社寺を存することは、日光が夙に海外に宣伝せられた所以であり、白根・男体・女峯の諸山が霊地として尊厳を保持する所以でもある。而も公園の大半が御料林或は国有保護林として維持され殆んど全区域を蔽して天然の博物館たるの観を呈してゐるのである。地は帝都に近く、奥部を除いては交通の便も極めて良く、観光、社寺巡拝、自然研究旅行、避暑、登山、野営生活、舟遊、釣魚、温泉保養、ハイキング、セーリング、スキー、スケート等殆んどあらゆる方面に適してゐるので、現在最も探勝者の多い国立公園の一となっている。

富士箱根国立公園

富士山が世界の名山として讃美せられる所以は、それが単に地学上標式的な円錐型火山の典型たるに止らず、渺茫たる東海に臨んで聳立する秀麗無比の雄大な山容が古来神山として国民的景仰を鍾め、世界に誇る可き尊厳と正大を示す我々日本の国の表象たる点にあることは云ふ迄も無い。富士箱根公園は此の霊峯富士とこれ又典型的複式火山として著名

な箱根山を含み、山梨・静岡・神奈川の三県に亘る六九、一〇〇町歩の面積を占めてゐる。富士の山体を繞つて明媚なる山中・河口・西ノ湖・精進・本栖の富士五湖を湛へ、雄大な青木ヶ原樹海や遠野ヶ原、間遠ヶ原の広潤な裾野平野を展開し、又三ツ峠・パノラマ台・天子ヶ岳・越前岳等はその外廓に當つて絶好の展望台を成してゐる。而して浅間神社の靈地はもとより、宝永山・大宝山・小富士を初め多数の寄生火山や多種多様の溶岩流の外、猪ノ頭の瀑園・白糸の景勝を加へ、又山腹山麓を飾る蓮華躑躅・富士桜・針樅等の各種の植物群落は殊に其の垂直的の分布に於て興味深く鳥類の繁殖も亦他に類例の少いものである。

箱根の区域は明神岳・金時山・乙女峠・長尾峠・鞍掛山等の外輪山に囲まれ、静寂な芦ノ湖と千石原の草原を擁してその中央には神山・駒ヶ岳・双子山等の中央火口丘が優和な山容を以て抽出してゐる。大涌谷の爆裂火口や早川・須雲川の溪流に臨んで山中より滾々と湧出する箱根十二湯の温泉は古来名湯として知られ、箱根権現・早雲寺・関所跡・石垣山等の社寺史跡にも転た懐古の情をそそるものがある。従つてこの公園は特色ある富士登山を始めとして観光・ハイキング・避暑・野営生活・自然研究・舟遊・ゴルフ・乗馬等に適し、交通の至便とホテル旅館等の設備完備と相俟つて内外の探勝者が極めて多い。

中部山岳国立公園

中部山岳国立公園は所謂日本アルプス連峯の高山地帯を占め、長野、岐阜、富山、新潟の四県に跨る面積一七一、二〇〇町歩の一大山岳公園である。即ち北は白馬・立山・剣の諸山より南は乗鞍岳に至る間、鹿島鎗・針の木・蓮華・烏帽子・黒岳・鷲羽・燕・常念葉師・槍・穂高・焼・笠ヶ岳等雄渾限り無き一万尺級の高山を連ね、その間には豪壯な黒部峡谷や静寂明媚の上高地梓川峡谷其他黒薙高瀬等の溪谷、或は弥陀ヶ原・五色ヶ原・雲ノ平の如き台地等が顕著な地貌を示してゐる。而も鬱蒼たる森林は一帶の山腹、溪谷を蔽つて各所に美麗な林相を顕し、その上に屹立する岩岸は清白の雪溪を懸け、随所に展開する高山植物の御花畑や明快な岸壁美と相俟つて日本アルプス特有の景勝を誇つてゐるが、その中には国有保護林として保存されてゐる部分も尠くない。而して平湯・上高地・白骨・中房・葛・立山・鐘釣・蓮華等の著名な温泉は好適な位置に散在して自ら恰好の登山根拠地を成し、白馬山頂・針ノ木・立山室堂・燕岳・槍ヶ岳・乗鞍冷泉・双六・一ノ俣を始め百ヶ所に近い山小屋の設備と縦横に開鑿された登山道や上高地其他の野営場と相俟つて正に本邦登山地の王座を占めてゐる。上高地・白骨・平湯・中房・葛・黒部鐘釣等はいづれも相当な施設があり、松本・高山・大町・宇奈月等より比較的容易に到達し得るから、登山、野営生活に限らず一般の探勝、自然研究旅行にも便利である。又乗鞍岳、白馬山麓、立山弥陀ヶ原等は絶好の山岳スキー場として近時利用者が激増し、スキー小舎の設備も漸く完備しつつある。

吉野熊野国立公園

吉野熊野国立公園は、我々国立公園中、唯一の水成岩地形に属する吉野群山より北山川、熊野川、紀伊海岸に至る多種多様の風景地を綜合した面積五五、五〇〇町歩の公園で、奈良・三重・和歌山の三県に跨つてゐる。最北部には吉野神宮を中心に南朝の歴史を以て国

民の脳裡に強い印象を残す花の吉野山があり、その南に連る大峰山脈は山上ヶ嶽・大普賢岳・仏経ヶ嶽・釈迦ヶ嶽の蛾々たる山陵を連ね、東方を占むる大台ヶ原山は、日ノ出岳の展望地点や大蛇崕の断崖を擁する一大台地をなしてゐる。この吉野群山一帯は豊饒な地味と多湿な気象に基因して鬱蒼たる森林に蔽はれてゐるが、山中には大山蓮華や石楠の大群落を初め、学術上興味ある資料も尠くない。溪谷には大台ヶ原山に水源を發して東流するものに無数の瀑布を懸けて奇勝に富む大杉谷があり、大峯山と大台ヶ原山の間を貫いて南流する北山川は急湍深淵の一大連鎖をなし、就中幽玄な瀨八丁の勝景を以て世に知られ、その下流に連る秀明な熊野川と共に、本邦溪流中他に類例の無い河川景觀を誇つてゐる。更に紀州海岸は東は鬼ヶ城より西は串本に至る間隆起海岸独特の地形を連ねて雄渾なる外洋に面し、その豪壯明朗な海岸風景は本邦随一の定評を贏ち得てゐるが、而もこれ等多彩なる自然に配して、本宮・新宮・那智の由緒深き熊野三社を始め、熊野路一帯には神武建国以来の貴重な靈地、史跡が多く、又熊野より大峯山に亘つては古来修験道の靈地として多大の信仰を鍾めてゐる箇所も尠くない。従つてこの公園は単に観光、登山、舟遊等に特長を有するのみならず、精神的方面に於ても極めて意義深きものを持つのである。又著名な勝浦海岸の温泉郷の外、湯の峯の温泉地もあり、大阪・奈良・和歌山或は三重方面よりの水陸の交通機関は近時漸く利便の度を加へて来たので、南方の温暖な気候が四季を通じての樂園を現出するのと相俟つて、京阪の大都會を控へて利用者の数を激増してゐる。

大山国立公園

大山国立公園は鳥取県に位し、日本海に君臨する中国第一の高山であり、且鐘型火山の典型たる大山を中心とする面積一二、七〇〇町歩の公園である。大山は秀麗な山容を呈してその山頂の豪壯な大爆裂火口跡や山麓より山腹に広がる黒松林、中腹一帯を蔽ふ櫛の原始林、山頂を飾る伽羅木の群落を有して独得の景觀を具へ、中ノ海や島根半島一帯を俯瞰する雄大な眺望と相俟つて明媚な風景を誇つてゐる。大山の東南には怪異な山姿を有する烏ヶ山があり、東北方には矢筈山、甲ヶ山、勝田ヶ山、船上山等の山嶺を起伏し、山麓一帯には榊水原、福永原、鏡ヶ成、長野原等の広大な草原を展開してゐる。大山々腹には由緒深き大山寺、大山神社があつて、船上山上の史跡と共に意義深く、大山寺僧坊跡に位する大山寺部落は探勝上の中心をなすと共に避暑地として優れてゐる。前記諸山の縦走や地獄谷溪谷の探勝等の途も開け、此の公園は近時登山地として重きをなすと共に、冬季に於けるスキー地としては絶好のスロープと雪質に恵まれて西日本に於ける一大中心地となつてゐる。而して又此の公園の近傍には、三朝、関金、皆生、東郷等の温泉や、松江、美保の関、枕木山、出雲大社の名勝地或は又雄大な蒜山野の如き原野を繞らして居り、山陰地方に於ける觀光地として恰好の位置を占めてゐる。

瀬戸内海国立公園

白砂青松の美を誇る平和明朗の瀬戸内海風景は夙に内外人の人口には膾炙されてゐるが、瀬戸内海国立公園はその中でも大小無数の島嶼を浮べて典型的な多島海の最も美しい景觀を現出する所謂備讃瀬戸と称せらるる部分で、東は小豆島より西は鞆ノ浦に至る間、香川、

岡山、広島、三島の三県に跨つて海陸一八四、六〇〇町歩の面積を占めて居り、主として花崗岩より成る島嶼と海岸が紺碧の海上に映える鮮明な色彩は、海岸に随所に生育する黒松林と相照応し、而もその間には屋島、小豆島の如き熔岩台地や、大槌島・小槌島の如き熔岩丘の島々を交へて益々変化の妙を盡してゐる。源平の古戦場として有名な屋島は林相麗はしき松林に蔽はれて優雅な展望を有し、小豆島の寒霞溪は独特の岩石美と落葉潤葉樹林の景觀を誇る。内海を挟んで明朗闊達な眺望を恣にするものに新割山、大崎山等があり、繊細玲朗な群島の景趣を一望の裡に収めるものに鷺羽山、本島、高見島、白石島等がある。白砂青松の美を遺憾なく發揮する六口島、仙酔島、余島、釜島等は舟遊、釣魚の根拠地として絶好の位置を占め、清楚な海浜を有する直島、沙弥島等の海岸は海水浴場として優れた素質を備へてゐる。牛窓、庵治、直島、男木雌木の諸島や塩飽諸島、宇治島、走島、三崎栗島等いづれも鮮麗な景觀を呈し、その間に出没する多数の砂洲、岩礁はこれを縫つて行交ふ大小の帆船、汽船や海上各所に展開せられる内海漁業殊鯛網漁業の壯觀と共に内海独特の情景として極めて興味深いものである。又五剣山、屋島寺、神懸山、阿伏兎観音等の社寺や札所の霊場は讃岐路一帯の霊場名所を背後に控へて通路の杖を曳く者四時絶へる暇なく、高松、坂出、丸亀、多度津、牛窓、坂手、土庄、下津井、笠岡、鞆の諸港を中心として、大阪・神戸・尾道を始め、別府、宮島等の観光地或は芸予叢島の名勝地との間には観光船の便が良く開けてゐるから、この公園は本邦唯一の海上公園として、巡航、海水浴、釣魚、引網等に好適なのは勿論、海に親しまうとする者にとっては絶好の地位を占めるものであり、而も亦安徳天皇、崇徳上皇の御遺跡や古来東西交通の要路としての史跡に富むと共に、鬼ヶ島の伝説に因む雌木島の如きもあつて、一入興味を添へてゐるのである。

阿蘇国立公園

阿蘇国立公園は複式活火山として世界的に有名な阿蘇山一帯と九重火山帯に亘つて熊本大分両県に誇る面積六八、四〇〇町歩の地域を占めてゐる。阿蘇山は周囲延々三十里に及ぶ外輪山を以て圍繞せられた陥没火口原の偉大な広表の中に中央火口丘を抽出し、中岳、高岳、根子岳、杵島岳、烏帽子岳の所謂阿蘇五岳が或は温雅な山容を呈し或は奇岩屹立する峻峰を成して聳え、就中豪壯な中岳の大噴火口は偉觀を極め、噴煙天に冲する壯觀は正に驚嘆に値する。火口原は阿蘇谷、南郷谷の和かな田園風景を展開してゐるが、此の両盆地の水を集める白川、黒川は西方立野に近く合流し外輪山の一角を破つて肥後平野に流出してゐる。外輪山は盆地の周囲に牆壁を連ねその外方は広大な裾野を曳いて茫漠たる原野をなし、又西北部を占める菊池水原と深葉森林は豪宕な阿蘇の風景に一抹の色彩を添へるものであり、外輪山の内壁に望む遠見ヶ鼻、御成山等はいづれも展望地点として絶好である。九重火山帯は九州の最高峯久住山を盟主とし星生山、三俣山、大船山等高山植物に富む山嶺を起す一大高原地帯で、公園の区域は北方飯田高原に及び、大波濤の如く起伏する西南部山麓の原野は阿蘇の外輪山に連つて雄大無辺の感を抱かしめる。阿蘇に於ける湯ノ谷、地獄、垂玉、栃ノ木、戸下、内ノ牧、九重の法華院、筋湯等の温泉場は自ら此の公園の中心になつてゐるが、坊中より草千里ヶ浜を経て古坊中阿蘇神社に至る登山自動車道を

始め、道路の設備も整つてゐるから観光には極めて好適であり、登山、ハイキング、乗馬等を試みるのも面白い。熊本大分間の鉄道豊肥線が阿蘇盆地を横断する外、高森線、久大線の便もあり、而も別府、彦山、耶馬溪、高千穂峡其の他北九州に於ける観光地の中間に位してゐるので、各方面の探勝に極めて便利で観光客の往来は盛況を極めてゐる。

雲仙国立公園

長崎県に於ける四面環海の島原半島に聳立する複雑な集成火山の領域一三、一〇〇町歩の地域が雲仙国立公園である。一帯は最高峯普賢岳を始め独自の山容を誇る国見岳、妙見岳、眉山、野岳、九千部岳、鳥甲山、鉢巻山、高岩山、絹笠山等の構成する一大台地の地形を成し、その間草原美を有する田代原、空池原、宝原、論所原等の高原が拡がり、西南部には諏訪池の水景もあるが、夫々美麗なつつじ、犬柘植の大群落や落葉樹林に修飾せられた秀麗温雅な風景は山上より脚下に鏡の如き有明海や橘湾、天草灘を距てて阿蘇、霧島に連る九州の山河や天草の諸島錯綜せる海陸を一眸の裡に収める絵の様な眺望と共に雲仙の特色とする所であつて、探勝には躑躅紅葉の季節はもとより四季を通じてよい。公園の中央に位置する雲仙温泉地帯には古湯、新湯、小地獄等の泉源があり、雲仙の街には島原、小浜、千々石の三方面より自動車道を通じ、宿泊施設が完備して居て、付近一帯は観光、ゴルフ、乗馬、野営生活、ハイキング等各方面に適して居り、避暑地としても絶好な位置を占めてゐるから、長崎を控へて上海、南支よりの避暑客を併せて多数の内外人を迎へてゐる。

霧島国立公園

霧島国立公園は鹿児島、宮崎両県に跨る霧島山一帯面積二一、七〇〇町歩の区域を占めてゐる。霧島山は天孫降臨の霊峯高千穂と韓国岳を盟主とする二十余の端麗な火山が密集する火山群で、御池、小池、大浪池、六観音池等大小の特色ある円形の火口湖や御鉢、新燃等の標式的な噴火口を頂き中には湯の池の如く温泉を湛へるものがある。此の火山の地形は至る処より涌出する豊富な温泉群と相俟つて世界的特徴を示すものであり、山上より桜島を浮べた錦江湾を望み遠く開聞岳に及ぶ展望は特筆に値する。温暖多雨の気候に基因して霧島山の山腹には昼尚暗き常緑潤葉樹林が鬱蒼として生育し、その上部には赤松や樅の巨木を交へてゐるが、これは代表的な暖帯林として山頂部の広大な躑躅の大群落や蝦野の野生海棠、山麓に拡がる草原と共に濃艶な林相と華麗な景観を誇るものであり、大部分国有保護林になつてゐるで杜鵑や仏法僧等特徴ある鳥類も多く生棲してゐる。山麓に鎮座する霧島神宮、狭野神社、霧島東神社や山腹の白鳥神社には多数の参拝者があり、又高千穂、韓国、大浪の登山、新燃、中岳の躑躅の観賞はもとより山中の野営、ハイキング、自然研究も極めて興味の深いものであるが、その中心地をなす明礬、硫黄谷、林田、丸尾等の所謂霧島温泉では避暑や湯治に適し、又栗野岳、白鳥等の温泉や霧島神宮、狭野神社も登山口となつてゐる。而もこれ等の地は山麓を廻る国都線、吉都線、肥薩線の鉄道沿線の霧島神宮、牧園、栗野、京町、加久藤、飯野、小林、高原、都城等の各駅より自動車を通じ、温暖な南九州に於ける観光の中心地として四季の探勝者に賑つてゐる。

〈資料2〉『クーポンで国立公園めぐり』(昭和11年)旅程見本(出発地が京浜、近畿、中部)

阿寒 国立公園	【京浜より】発駅—青森—函館—旭川—野付牛—美幌—北見相生—阿寒湖—北見相生—美幌—美幌峠—屈斜路湖—川湯—弟子屈—釧路—滝川—札幌—発駅 (標準所要日数10日)
	【近畿、中部より】発駅—青森—函館—旭川—野付牛—美幌—北見相生—阿寒湖—北見相生—美幌—美幌峠—屈斜路湖—川湯—弟子屈—釧路—札幌—発駅 (但富山、金沢発ノ場合ハ北陸線経由) (標準所要日数12日)
	【公園内クーポン指定遊覧地】摩周湖、阿寒湖、屈斜路湖、川湯温泉、弟子屈温泉 (当別温泉) 以上五ヶ所
大雪山 国立公園	【京浜より】発駅—青森—旭川—上川—層雲峡—小函—層雲峡—上川—札幌—定山溪温泉—札幌—青森—発駅 (標準所要日数6日)
	【近畿、中部より】発駅—青森—旭川—上川—層雲峡—小函—層雲峡—上川—札幌—定山溪温泉—大沼—大沼公園遊覧—函館—湯の川温泉—函館—青森—発駅 (発駅—青森間は最短距離による) (標準所要日数8日)
	【公園内クーポン指定遊覧地】層雲峡
十和田 国立公園	【京浜より】発駅—青森—十和田湖子ノロ—生出一大湯温泉—毛馬内—好摩—花巻—花巻温泉—松島—塩釜—仙台—発駅 (標準所要日数7日)
	【近畿、中部より】発駅—青森—十和田湖子ノロ—生出一大湯温泉—毛馬内—鶴岡—湯野浜温泉—三日市—宇奈月温泉—三日市—発駅 (往路は各発駅より最短距離による) (標準所要日数8日)
	【公園内クーポン指定遊覧地】十和田湖、蔦温泉、大湯温泉
日光 国立公園	【京浜より】(一) 発駅—日光—中宮祠—湯元温泉—日光—発駅 (標準所要日数2日) (二) 発駅—日光—中宮祠—湯元温泉—丸沼温泉—沼田—発駅 (標準所要日数3日) (三) 発駅—日光—東照宮—鬼怒川温泉—今市—発駅 (標準所要日数2日)
	【近畿、中部より】発駅—直江津—長野—前橋—小山—日光—中宮祠—湯元温泉—日光—東京—発駅 (標準所要日数4日) 発駅—東京—日光—中宮祠—湯元温泉—日光—鬼怒川温泉—今市—発駅 (標準所要日数5日)
	【公園内クーポン指定遊覧地】日光 (東照宮、華厳滝、中禅寺湖)、日光温泉、奥日光 (丸沼、尾瀬沼)、鬼怒川温泉、川治温泉
富士箱根 国立公園	【京浜より】(一) 発駅—小田原—宮ノ下—元箱根—芦ノ湖—千石原—宮ノ下—小田原—発駅 (標準所要日数1日)
	(二) 発駅—小田原—小涌谷—強羅—早雲山—湖尻—元箱根—小涌谷—小田原—発駅 (標準所要日数2日)
	(三) 発駅—小田原—宮ノ下—箱根町—甘酒茶屋—湯本温泉—小田原—発駅 (標準所要日数1日)
	(四) 発駅—小田原—宮ノ下—箱根町—十国峠—熱海町—発駅 (標準所要日数1日)
	(五) 発駅—大月—富士吉田—河口湖—山中湖—御殿場—発駅 (標準所要日数1日)

	<p>(六) 発駅—大月—小沼—三ツ峠—河口湖—船津—富士吉田—大月—発駅 (標準所要日数 1 日)</p> <p>(七) 発駅—大月—富士吉田—河口湖—西湖—精進湖—船津—山中湖—御殿場—発駅 (標準所要日数 2 日)</p> <p>(八) 発駅—甲府—下部鉱泉—身延山—富士駅—発駅 (標準所要日数 2 日)</p> <p>【近畿、中部より】 発駅—直江津—塩尻—大月—精進湖—山中湖—御殿場—箱根千石原—宮ノ下—小田原—東京—米原—発駅 (標準所要日数 5 日)</p> <p>発駅—熱海—十国峠—箱根—千石原—御殿場—山中湖—精進湖—富士吉田—大月—甲府—塩尻—名古屋—発駅 (標準所要日数 5 日)</p> <p>【公園内クーポン指定遊覧地】 箱根温泉 (湯本、塔ノ沢、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀、小涌谷、強羅、姥子、芦ノ湖 (ママ))、芦ノ湯 (ママ)、千石原、山中湖、河口湖、西湖、精進湖、本栖湖、三ツ峠</p>
<p>中部山岳 国立公園</p>	<p>【京浜より】 (一) 発駅—甲府—塩尻—松本—浅間温泉—上高地—松本—篠井—高崎—発駅 (標準所要日数 3 日)</p> <p>(二) 発駅—甲府—塩尻—松本—上高地—松本—信濃大町—信濃四谷—二俣—白馬岳—松本—発駅 (標準所要日数 5 日)</p> <p>(三) 発駅—甲府—松本—上高地—槍岳—大天井—燕岳—中房温泉—有明—松本—発駅 (標準所要日数 4 日)</p> <p>(四) 発駅—甲府—松本—信濃四谷—二俣—白馬岳—鐘釣温泉—宇奈月温泉—三日市—発駅 (標準所要日数 4 日)</p> <p>【近畿、中部より】 発駅—三日市—宇奈月温泉—鐘釣温泉—白馬岳—二俣—信濃四谷—松本—上高地—松本—発駅 (標準所要日数 4 日)</p> <p>(一) 発駅—松本—浅間温泉—松本—上高地—松本—発駅 (標準所要日数 3 日)</p> <p>(二) 発駅—松本—信濃四谷—二俣—白馬岳—鐘釣温泉—宇奈月温泉—三日市—米原—発駅 (標準所要日数 4 日)</p> <p>【公園内クーポン指定遊覧地】 浅間温泉、上高地 (乗鞍岳)、白馬岳 (常念岳、燕岳)、宇奈月温泉</p>
<p>吉野熊野 国立公園</p>	<p>【京浜より】 発駅—名古屋—山田—伊勢大廟参拝—二見—桜井—吉野—吉野山—橋本—高野山—和歌山—白浜温泉—紀伊椿—下里—那智滝—新宮—瀨八丁—本宮—湯の峯温泉—朝来—和歌山—大阪—奈良—名古屋—発駅 (標準所要日数 11 日)</p> <p>【近畿、中部より】 発駅—山田—伊勢大廟参拝—二見—相可口—尾鷲—木本—新宮—瀨八丁—新宮—那智滝—勝浦—下里—紀伊椿—白浜温泉—和歌山—大阪—発駅 (標準所要日数 8 日)</p> <p>(一) 発駅—吉野口—下市口—大和上市—吉野山—大和上市—柏木—入之波—大台ヶ原山—吉野口—発駅 (標準所要日数 4 日)</p> <p>(二) 発駅—和歌山—白浜温泉—朝来—湯の峯温泉—本宮—瀨八丁—新宮—那智滝—勝浦—新宮—木本—尾鷲—相可口—亀山—天王寺—発駅 (標準所要日数 6 日)</p> <p>【公園内クーポン指定遊覧地】 吉野山、大台ヶ原山、大峰山、竜神温泉、潮岬、鬼ヶ城、勝浦、</p>

『クーポンで国立公園めぐり』に見る遊覧旅行の一考察(谷沢 明)

	那智滝（那智神社、那智寺）、瀨八丁、熊野本宮（湯の峯温泉）
大山 国立公園	【京浜より】発駅—京都—大山口—大山登山—大山口—米子—出雲今市—大社参拝—一畑薬師—松江—美保関—隠岐島—境港—岡山—発駅（標準所要日数9日）
	【近畿、中部より】発駅—鳥取—上井—三朝温泉—伯耆大山—大山登山—松江—出雲大社—一畑薬師—北松江—発駅（標準所要日数6日）
	【公園内クーポン指定遊覧地】大山
瀬戸内海 国立公園	【京浜より】発駅—大阪—岡山—宇野—高松—屋島—琴平—松山—道後温泉—高浜温泉—大三島—尾道—大阪—発駅（標準所要日数7日）
	【近畿、中部より】（一）発駅—岡山—高松—屋島—多度津—鞆ノ浦—徳山（ママ）—発駅（標準所要日数5日） （二）発駅—大阪—小豆島—高松—屋島—宇野—茶屋町—鷺羽山—岡山—発駅（標準所要日数5日）
	【公園内クーポン指定遊覧地】厳島、鞆の浦、鷺羽山、小豆島、屋島、大三島
雲仙阿蘇 霧島 国立公園	【京浜より】（一）発駅—神戸—別府—大分—坊中—阿蘇山—熊本—三角—島原—雲仙温泉—小浜温泉—長崎—諫早—下関—発駅（標準所要日数9日） （二）発駅—下関—小倉—別府—延岡—高千穂—延岡—大淀—青島—霧島神宮駅—霧島温泉—鹿児島—桜島—指宿温泉—阿久根—天草島—三角—熊本—門司—発駅（標準所要日数14日）
	【近畿、中部より】発駅—神戸—別府—宮崎—霧島神宮駅—霧島神社—霧島神宮駅—鹿児島—熊本—坊中—阿蘇山—熊本—三角—島原—雲仙—小浜温泉—諫早—博多—下関—発駅（標準所要日数12日）
	【公園内クーポン指定遊覧地】雲仙、阿蘇山、阿蘇温泉（栃木、戸下、垂玉）、霧島（温泉、神宮）

* 出発地が北海道、東北、中国、九州のものは割愛した。

注

- 1) 藤井務氏は、その後日本交通公社の文化課長、調査部次長を経て、公社関連の琉球総合開発株式会社の常務取締役となって沖縄の本土復帰直後の沖縄ハーバービューホテルの運営に当られた。後に創立にかかわった日本ユースホステル協会の理事長に就任している。
- 2) 藤井務「資料系の6年間」(手記)
- 3) 『クーポンで国立公園めぐり』ジャパン・ツーリスト・ビューロー、昭和11年、p1~2
- 4) 前掲3)、p2
- 5) 村串仁三郎『国立公園成立史の研究』法政大学出版局、2005年
- 6) 前掲3)、p3
- 7) 『日本交通公社七十年史』日本交通公社、昭和57年、p56~57
- 8) 前掲3)、p4
- 9) 前掲3)、p3
- 10) 前掲7)、p55
- 11) 前掲3)、p3
- 12) 前掲7)、p55
- 13) 前掲2)
- 14) 『日本交通公社50年史』日本交通公社、昭和37年、折り込み資料
- 15) 前掲7)、p35
- 16) 前掲7)、p35
- 17) 前掲7)、p34
- 18) 昭和6年(1931)に満州事変が勃発。昭和8年(1933)には国際連盟を脱退していた。
- 19) 前掲7)、p76